

200カイリ水域内漁業資源総合開発調査

本永文彦*

1. 目的及び内容

本調査は国庫委託を受けて昭和52年より継続実施している。

沖縄県水域内における重要漁業資源を、科学的根拠に基づいて資源管理を行なうのに必要な漁獲統計及び生物情報を収集することを目的とする。

2. 方法

①標本船調査

糸満漁協所属の底はえ縄漁船を標本船として指定して、毎月の出漁日、漁場位置、魚種別漁獲量の報告を受ける。

②保護量統計の整理

1989年以降、沖縄県内各市場でのセリ販売記録（主にコンピュータデータ）を基に漁獲量統計を蓄積・整理している。この資料を用い、地区別・漁法別・魚種別・漁獲量統計及び漁獲努力量統計（水揚げ隻数）を作成し、漁業・資源動向をモニターする指標として利用する。

また、糸満漁協に水揚げされる魚種について、同漁協職員にセリ山当たりの尾数を記録することを依頼している。この資料を用い、“たまん”や“あかじん”などの体重組成を作成し、年齢組成を推定する指標として利用し資源解析の基礎資料とする。

3. 結果

①標本船調査

標本船による詳しい漁獲状況についての資料を受理し、現在資料の整理中である。

②漁獲量統計の整理

得られた漁獲統計は詳しい漁場位置や漁獲努力量に関する情報を欠くが、地域別の漁法別魚種別漁獲量と

水揚げ隻数を知ることができる。現在、これを整理した「沖縄県漁獲統計年報（仮称）」を作成すべく準備中のため詳しくは別途報告する。

今回は、ハマフエフキ（たまん）、シロクラベラ（まくぶ）、スジアラ（あかじん）について、漁獲量の整理が若干行えたので、その報告をする。

たまん（ハマフエフキ）：糸満漁協市場における底はえ縄漁業

喜屋武（1987）の漁獲資料に1986年以降の資料を加え、漁獲量と延べ隻数、C/Bを集計した（図1、2）。集計方法は喜屋武（1987）によった。

漁獲量は、1977～1987年に17～31 t の水準で変動していたが、1988～1992年は12～18 t に減少している。

延べ隻数は、漁獲量に比べ変動幅は小さいが、1981年以降に減少し、近年は1,200隻前後と少ない。

C/B（水揚げ隻数当たりの漁獲量）は、1980年に増加したが、その後次第に減少している。

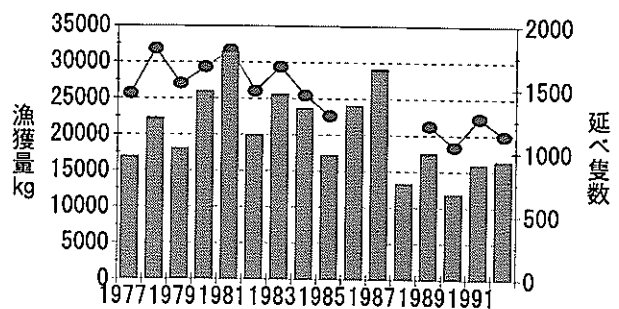


図1 たまんの漁獲量と延べ隻数の推移

まくぶ（シロクラベラ）：勝連漁協市場における潜水器漁業

沖縄水試漁獲統計資料を基に漁獲量と延べ隻数を集計した（図3）。集計方法は喜屋武（1987）によった。

漁獲量は、1985年の10 t を最高にその後減少し、

*現在の所属：農林水産部 漁政課

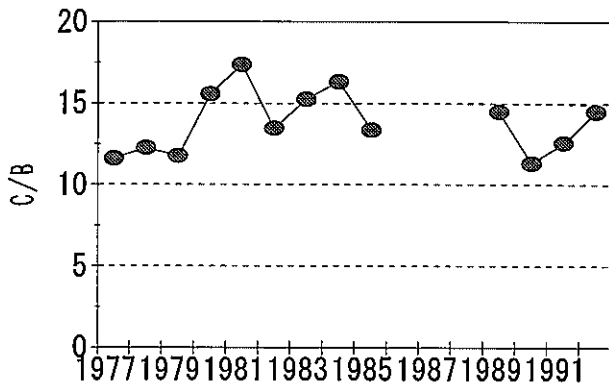


図2 たまごのC/Bの推移

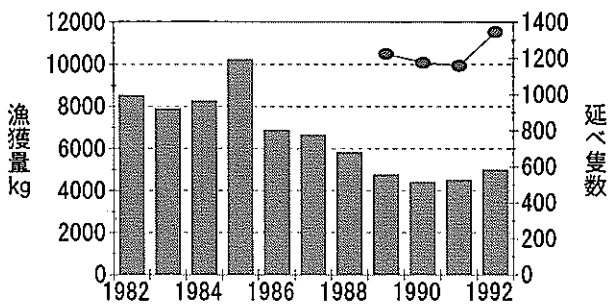


図3 まくぶの漁獲量と延べ隻数の推移

1989～1992年は4～5 tの低水準となっている。

延べ隻数は1989～1991年に減少していたが、1992年にやや増加した。

この海域において、1986年以降のべら類、ぶだい類、はた類などの資源減少に伴い、潜水器漁業から他の漁業（もずく養殖など）へ転出する者が多くみられた。1992年の延べ隻数の増加は漁期途中にヒブダイやシロクラベラ等の新規加入が比較的良かったことにより、出漁回数が増加したとみられる（聞き取り）。なお、この傾向は1993年前半まで続いていた模様。

あかじん（スジアラ）：名護漁港・県漁連の市場における潜水器漁業など

潜水器漁業による漁獲物の中では本種の価格は高く、シロクラベラと同様に重要種である。入荷の多い県漁連、名護の市場での水揚量をみると、それぞれ1989～1992年の間に名護港で11～12 tで横ばい、県漁連で67～87 tへと増加していた。沖縄でのぶだい類、はた類、べら類の漁獲量は減少しているとみられるが、需要は多く、海外からの入荷量が増えている模様（聞き取り）。

なお、外国産の漁獲については、別途集計を進めており次回報告したい。

トビイカ（とびいか釣り）

トビイカの漁期は7～10月、盛漁期は9～10月である。近年は漁業者の高齢化が進み、従事者数は減少している。1993年漁期は例年通り8月後半より好調となり、漁獲量が多く、港によっては生産調整を行っていた。